

---

# HELLSNGのアーカード肉体を授かり異世界へ

怠慢期

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

HELLS NGのアーカード肉体を授かり異世界へ

### 【Nコード】

N0116BA

### 【作者名】

怠慢期

### 【あらすじ】

え？ 異世界？ チート？

ああ、あんまり興味ないかなあ。なぜかって？ そりゃあ、何年も前ならいざ知らず、俺、今幸せだから。

## 序章（前書き）

怠慢期が好き勝手やらかしてしまっているので、吐き気や怒りを感じ  
る場合はご入場をお控えください

## 序章

鈴木勲<sup>すずき いさお</sup>

彼が仕切りという疑念のない場所で突然意識を覚醒させたことと、発光体から念力のような力で言葉を投げかけられたことは同時に発生した。

鈴木勲という人物を紹介し説明するのは簡単だ。年齢29歳、顔は男性らしいかくばった形状でいて目に留まるのは勇ましいという言葉とは離れたパツチリとした目付き。仕事は程ほどに大きな会社の事務。自身の故郷から大学進学のため上京しそのまま就職。妻帯者であり5歳になる娘もいる。

典型的でありながら大多数が充実感を感じるほぼ全てを保有している勲は、なぜか辺り一面が白という単色しかない、ともすれば吐き気をもよおし、発狂しかねる空間に一人立っていた。立つということからは彼の身体を支える硬質な物体——すなわち地面もしくは床——が彼の靴底には在るはずだ。だがその感触がある場所さえ白という一色で塗りつぶされ、一步でも足を踏み出してしまえば身を投げるかのように永遠ただ落下してゆくのではないかと錯覚させられるほどに単色だった。

勲は一人困惑する。この状況と目の前に発光体に。

この空間で意識を覚醒させた直後から辺りを見回し、自らの身体を叩くなどして異変がないか確認した彼は、ここが理解不能な空間であり、普段どおり外出用の服装をしていると判断した。

空間への認識は一度とさえ視覚したこともない研究所のような意味不明な場所。自身の服装に関しては灰色のハイネックに群青色の幅に余裕のあるデニムのズボン。そうして黒の革靴を履いていた。彼は今の場所と五体満足を確認し、理解不能ゆえの現状に対し否定

的な感情を頭痛として感じつつ、自身の視界に映る空間に次ぐ意味不明な物に意識を移した。

それは発光の状態だけをみるだけでは蛍のようだった。

暗闇の中で光るほのかな自然の光源。それを家族旅行で見られればどれほど癒しだっただろう。しかし彼の10メートルほど前方にいたのは暗闇の中で視認できる光源とは違い、この純白で埋め尽くされ暗闇の黒の欠片もない場であるのにも関わらず発光しているように認識することのできる彼の知識の中にはない何かだった。

それは先ほどから念波のようなものを利用して彼に語りかけてきていた。しかし勲は状況を整理することで手一杯だったため、それは独白になってしまっているが。その内容は彼に対する説明のようだったが状況判断後、ようやく冷静になり不信な発光体に顔を顰め、渋々耳を傾けた勲にとっては説明を理解するほどの十分な解説には値しなかった。

「——というわけだ」

「……もう一度、初めから説明を要求する」

よもやこの発光体は地球人を攫った宇宙人なのではないか、というファンタジックな仮想を立てながら勲は警戒心を持ちつつ、説明し終えたのか言葉を区切ったそれに言う。

そうすれば呆れたように、聞いていなかったのか。などという言葉が送られてきて、ビクリと身体を震わせる。念波のような声は口許の動きを追って身構えることができないためいつ発せられるかわからない。しかも空間から脳内に直接響くように聞こえてくるため緊張で精神を張り詰めている彼にとっては酷く心臓に悪い。

そんな彼の心境を理解していない発光体は再び説明を開始した。

「鈴木勲。君は一度死んだ」

「しんだ……死んだ？ まさか」

「嘘ではない。君は事実として死んだ。まあそのときの記憶がないのだから信じがたいのも分からないでもない。だが君は死んだんだ」

名前を言い当て、そうして死んだと明言するそれに絶句する。一度目なら反論する余裕もあったが、これほどに死んだと断言されれば口も噤みたくなるものだ。

何せ行き成り異空間で覚醒したかと思えば発光体に自分が死亡したと断ぜられる。彼の体はここにあるのに、だ。確かにこの空間は現実ではありえないかもしれない。確かに目の前の発光体は常識の中ではありえないもののかもしれない。だがある意味でそれだけだ。それだけの要因でそれは鈴木勲の死を彼に伝えてくるのだ。

発光体は浮遊しているという感覚も凍るように空中なのだろう白い背景に停止したままだ。

一度、彼はゴクリと唾を飲み込む。無意識に鋭くなる目付きと共に懐疑心が膨らむのをどうにか抑え、口を開く。

「なら、ここはどこだ。どうして俺はここにいる」

「そう焦るな。そうだな、ここは天国とでも言っておこうか。難しく言えば世界と世界の間。何も存在せずあるはずもない隙間さ」

「……どうしてここに俺はいる？」

「ハハハッ、そんなに固くならなくてもいいじゃないか。

そうだね。ちよつとした手違いで、かな？」

徐々に露になつてゆく愉快そうな口調。勲の尖り、隠しきれない警戒心を滲ませる声を笑い飛ばし、初めのほうは事務的な言葉遣いだった会話がだんだんと性格や心情を明かす。

発光体は顔も胴体も何もないというのに、声だけは感情豊かでどんな人物がすぐに読み取れる。発光体の人物——何者かは勲には仮想しかできないが——は、どうにもこの状況を楽しんでいるようだった。それは困惑し警戒する勲のせいなのか、それとも人物の“手

違い”で作り出されたこの状況自体になのかは本人しか知らぬところだが。

手を伸ばしても届かないが、数歩歩けば捕らえる距離にいる手の平程度の小さなそれは変わらぬ調子で言葉を続ける。

「さすがに今回のミスは僕が悪かったからね。謝るよ」

「謝罪はこのさいどうでもいい。俺は生き返ることはできるのか、それはいつなんだ」

納得は到底できそうにないが、鈴木勲が死亡した。と仮定しなければ話は進まないと判断した彼はそのまま話の腰を折らずに問いを投げかける。実際問題、彼にしてみれば先ほどから理解の欠片もできない事柄をぺらぺらと語っている発光体に詰め寄りたい焦燥感を感じているが、そんなことをしても一番確かめたい事柄に近づけないと冷静に思慮し——彼をそうさせてくれているのは皮肉なこと——ここに來てからずっと感じている悪寒なのだが——堪えている状態だ。

発光体がいうには、全面的に自らの失敗を認めている。ならばこの事態は発光体が原因ということになる。それについて彼は今はそれほど気に留めていない後回しでいいほどだが、それならばこの空間に自分を閉じ込めたのが発光体である可能性、異なるのならその発光体が原因や意味などを承知しているのは口ぶりからして明らかだ。

その中で、彼が懸念したのは自らの今後の安否。彼は現状が夢などという、現実ではない可能性はとうに諦めていた。どこかに隔離されていると推測し、ならばこの空間から出られることはできるのか、それはすぐなのか、それともここで数時間閉じ込められなければならないのか。家族の元へ何事もなく帰れるのか。それだけが彼が考慮していることだった。それを知るためならば、目の前の発光体とも口を利くことも仕方がないという姿勢であり、言うなればそ

れだけが彼にとっては警戒しか持てないものに対する唯一の会話を  
するに堪える必須の情報だった。

「無理だよ」

だが眼前の発光体は、それをいとも容易くふいにした。

挨拶でもするように自然に発せられた言葉は、勲の希望や想定を  
ぶち壊すには十分だった。

「無理、とは……」

焦燥に身を焼いていたはずの彼から全ての温度が消え失せる。

言葉の意味を理解することを拒絶する脳内は、思考が意味を割り  
出す前に耳を削ぎとり、地団太を踏んで暴れまわり会話の全てを忘  
れ去りたいと慨嘆する。だが直接頭に割り込むように伝わってきた  
言葉が拒絶の意志を通り越して反芻され、感情が濁流として流れ出  
す。

同時に視界も聴覚も、ブレーカーが落ちた様に真っ暗闇になった。  
発光体はそんな彼の様子や形容ならない能面のような表情にも気  
付いているのか気付いていないのか関心を寄せず、茫然とした彼の  
問いにもならない呟きに、子供のような無邪気さとそれゆえの無垢  
な辛辣さをもって跳ねるように言葉を返す。

「だから、無理なんだってば。ミスだったとしても死んだ人間を元  
の場所へ送り返すのは出来ない。残念ながらね」

「ど、どうして」

「どうしてもなにも、そういう決まりだし、やり方知らないし」

岩石にでもなったかのように動かぬ身体を、器官をどうにか息を  
吸い込み声を発し動作させる。させなくては、彼の理解停止だから

こそいまだ儚く存在し続ける凍った希望は、確認するまでもなく潰える。

だがそうしても尚、ただ繰り出されるのは一転して淡々とした、面倒臭そうな雰囲気の漂う念派の数々。それは、彼にとって凍結した希望を木っ端微塵に打ち砕く絶望の数と同数だった。

問うほどに地に落ちてゆく。最終的な“方法を知らない”という言葉に、彼は口を開くことをやめた。

止めて、ようやく理解する。

“これ”は発光体にすれば“決定事項”であり、それは即ち自身にも当てはまる“事実”なのだ。

自らが死んだという実感は今だない。だが、発光体が言うのならそれは彼にとっては確定した事実となるのだ。それは説明の限り発光体が勲をこの場に拉致し、そうして彼を帰す気がないからだ。

——ならば死亡という事柄の真偽に関わらず、彼はこの発光体に従うを得ない。それが、例えもう二度と彼がいつもの日常、失われるなどと考えることもなかった時間がなくなる受け入れがたい事態だとも。

不規則に脈動するかのような錯覚を感じるほど大きく振動する左胸が、彼を感じ始めた感情の流動に併せ動機する。爆発物のように危なげに脈打つ心臓の上に握りこぶしを当て、彼は自ら会話を再開させる。

「じゃあ、お前が俺を、元の場所に帰すのは、出来ないんだな」

「出来ないものにも、する気もないしね」

立ちくらみが、視界が歪んだような感覚が彼を襲う。

軽い口調で叩きつけられた発光体の意志を反芻する、反芻される、

——する気もない——？

「……」

ともすれば厳しいとも指摘される勲の顔はそれを唯一払拭させるはずの目元が細まる。青ざめ、冷たいほどだったはずの顔に火が付けたかのように熱が灯る。一瞬にして爆発寸前の憤怒の表情となるが、それは彼がそれに彼が元から持ちえていた冷静さで気付き、一瞬後に瞬きすれば、会話開始時の緊張感を持った神妙な表情に戻った。

「……」

心拍数を拳の叩く回数に合わせるように、ゆっくりと叩く。それは暴れ回る心臓をどうにか落ち着かせることを意識した行動だった。顔は落ち着いたとて、彼の臓器は感情に流されるまま、気付かれてはならない。気付かせてはならない。

彼には希望が潰えたこの一瞬で、それをしなければならないような目的ができた。

それまで一切勲の声以外に反応してこなかったそれも彼の沈黙の長さに違和感を感じたのか、意味ありげな含み笑いをして念波を送る。

「驚いちゃった？ でも安心してよ。君はまで生きられる」

「……」

「勲くん。君は好きな力を持って異なる世界へ旅立つんだ」

子供が自慢をするように、研究者が論文を発表するように仰々しく発光体は彼の決定した今後を宣言した。

彼が沈黙しているのを聞き入っていると判断し、本当の彼の心境など検討もつかずにそれを言い終えた。

このような展開に、彼は覚えがあつた。今から何十年も前に携帯

やパソコン上で暇な時間を過ごすときや、現実逃避で想像や都合のいい妄想に浸りたかったときに読んでいた小説の中でも二次創作というジャンルで、よくある展開として使用されていたと覚えていた。そうしてそのような“お約束”のお話が目の前に繰り広げられているのだと確信する。その発光体は彼自身がそれを知っていることを前提として話している節と、それを歓喜し歓迎すると信じきっている。

その一連の流れが小説の中でもなく夢でもなく、自身に起こっている現実としてそれを受け入れた彼は帰れないと結論付けたときから頭に浮かんでいた妻と子の顔をかき消した。

この場で思考すべきはそれではない。目の前の発光体は好きな力を、と大盤振る舞いをした。ならば、その能力について考えるべきだ。

「……なんでもいいのか？」

「いいよ。でも、一つだけ」

「なら、ヘルシングという漫画の、アーカードという主人公の身体を貰い受けたい」

「HELLSINGのアーカードの身体……なるほど、またおもしろいね」

発光体が感想を述べたときには、彼の身体は変化していた。体は瘦躯長躯。視界は高く、髪は重そうな長髪になりその分の重量を頭部を支える首に感じ、服装は彼が指定した漫画主役の定番服という目が痛くなるような真っ赤なコート。ズボンはデニム生地のようにだが黒一色で足を締め付けるように密着しており、底の高いブーツはズボンと同じ黒で固められている。

様変わりした自身の姿を自覚した彼は、このキャラクターを記憶していた自分に感謝した。力、などといわれても、仕事に追われ家族サービスに追われる一般人が早々直に思いつくものではない。だ

が現在でも自室にある娘には見せられない血飛沫の舞う漫画を力という単語から手繰り寄せて思い出せたのだ。一つだけ、ということで少々不安ではあるが、これで自分には十分だと暗示するように彼は自身に言い聞かせる。

そのまま、動作確認などはせずにただ胸に新たに手袋が嵌まった拳をあて続けた。

冷静さを完全に取り戻したのか、心臓の拍動は通常に戻り、遅い速度を叩くことはなくなった。だがその拳は、今までの身体から突然変化した身体の肉体の調節に間に合わず白い布を爪が突き抜け肉をも抉るほどに握り締められていた。

からだ全てを総とつかえた彼は厳しくはつきりとした目が特徴的だった顔から、白い肌に中性的なほどに整った顔に様変わりした。彼はそれを無表情にして、一步、足を踏み出す。そこは白一面の、間違えれば落下しそうな錯覚を覚える足場。しかし彼はそれを物とせず、ただ無感情に一步また一步と進んだ。進むことが出来た。彼は握り締め血が流れ出す手をそのままに。ただひたすらに前へ歩を進めてゆく。

「あれ、どうしたの？ 勲くん」

「いや……こんな素敵なプレゼントをしてくれた本人に会いたいと思っただけだ。」

「これがお前自身なのか？」

発光体との距離を完全になくし、30センチほどの距離になったときそう互いに言葉を伝え合う。

どうやら発光体は言葉を発するだけでなく、相手との距離なども感知できるように設計されているらしい。彼はそう判断すると、微笑みもせず発光体からの返答を待つ。幾分か背の高くなった彼はその発光体を見下すほどの身長を手に入れ、実際に上から除き見るように発光体に視線を向けていた。彼の顔は、長すぎる長髪に隠され、

幸か不幸か血に濡れ腕にまで伝い出した血も黒髪が覆っている。

発光体は近くなった距離に特に文句も言うことなく、気分を向上させたままの口調で彼に語りかける。発光体は、距離を感知しても、血の臭いは嗅ぎ取れはしないようだった。

「まあね。とりあえず君の概念から“神”っていう概念で作り上げてるんだけど」

「なら、お前は神なのか？」

「一般的にはそう呼ばれるかもねえ」

——彼にはそれで十分だった。

神というのは、無信教である彼にとっては関心のないことだった。ある意味でその問いは時間稼ぎであり、必要な情報はその発光体が発しているものの本体だという証明だった。

なるほど確かに神ならば、彼にとってはそこにあるだけでいい。特に人の形をしていなくなつて、目も鼻も口もなくなつたって、超常現象的なそれがあれば神らしいし、嗅覚などなくとも関係がない。

だがそれももう関係がない。ただそれは彼にとって都合がいい事柄だっただけだ。

彼はその神と名乗るやからに問いかけて、違うというのなら姿を現すように願い出ていた。どうしても、彼はその本人を目の前にしたかった。神に出会い、神に接触し、干渉できるようにならなくてはならなかった。そうして、その発光体が神本体であり、それができる状況だと——彼の知識ではなく、彼の身体が本能的に囁き——分かったならば。

胸の位置で握り締めていた赤い拳を開き、伸ばし。むんず、とその発光体を手袋に覆われもとの手とは違う細い指で掴み取る。少々大きくなつた手の平がそれを覆い尽くすことは容易だった。そして

彼の今の身体は、発光体が彼の行動の異様さが己の身体に関わることだと気付き反応する前に、行動をとることは簡単だった。

包み込んだ手に痛みやむず痒さはない。だがビクリと動いたような感触を伝えた皮膚に、“ああ生きているのだ”と安堵する。

生きていないと意味がないのだ。彼が今からする行為は、この発光体が確かな命を持つていないことには成立し得ない。だから彼は安堵する。自分をこんな目に合わせた、もう日常には戻れずに、愛した人たちには再会することはできずに、血の繋がった可愛い盛りの自分の命にかけても守りたい娘の成長を見守れない事実、何よりそれら全ての鈴木勲という未来を奪われる原因となった童子のような純粹さを持つそれが生体としてある事実途方もない歓喜が湧き上がった。

白い空間で唯一の黒と赤が、手にした獲物を逃がさぬよう壊さぬよう全力の握力で握り締める。伸ばしていたその手を折り曲げて、発光体を手に収めた拳をそのまま口元へ手繰り寄せ――望みを果たすように、人であったことを捨てるように、慈悲もなく容赦もなく、彼は“捕食”した。

「ぎゃああああああアアアアアアアッ！！！」

頭部を鈍器で殴りつけるような悲鳴とも奇声ともつかない絶叫がこの空間全土に響く。アーカードという吸血鬼という設定である身体の犬歯で抉った発光体は、口腔から伝わる確かな柔らかさと共に塞ぎようのない傷を負わせた。

抉られた傷口からは人間の血液と同じ赤い色が噴出し、鋭い歯で貫くその口と上半身に絵の具をぶちまけるように降り注ぐ。口元に溢れる血液のようなそれを、抵抗もなく飲み下しながら彼は神でも血は出るのだと、赤いのかと思かし、薄く、柔らかく、その顔は慈悲を与える聖母のように微笑まれた。

「いだ、あああああつ、ああああ、あああああああ！！！！」

脳髓から破壊するかのように鳴り響く痛覚の叫びが聞こえていなかのように一心不乱に尽きることがないかのように噴出するそれを吸い込んで行く。

飛び散る赤は、びちゃびちゃと水滴のように撒き散らされ純白の地面に印をつける。純白だけだった神聖なはずの場所は、無遠慮に臆面もなく汚染される。もはやそこは白いだけの空間ではなく、赤い着色料を撒き散らしたキャンパスだった。

節操もなく飛散する目も覚める赤色により、清らかだったのかもしれない空間は狂気に染まる。

「ぎえ、るああああああ、いいあああああああつっ」

パンツと風船が割れる音がして、同時に彼の拳にあった発光体の肌触りも消える。それは神と名乗った存在が消滅したことを示しており、その魂が飲み込んだ血に似た液体により彼自身に取り込まれたことを意味していた。

彼は感慨もなさそうに血に濡れて、発光体だったその原型もなく吹き飛んでしまつて形作っていたものの欠片もない手の平を見つめて、呟いた。

「雪、由」

それは鈴木勲という男の妻と子供の名前だった。悲しげに、赤で染まつたまま慈愛に満ち溢れた声色で、二人の名を呟いた。

彼は幸せだった。自分の今の生活に満足していた。

仕事の中で本音を隠し、怒りを抑えることを学んでいた。人より冷静な判断や行動をできると自負していた。そして彼は普通の思想

の持ち主だった。自分の許せないことをされたら苛立ちもするし、悲しみ苦しみ、そうしてそれがどうしようもなく許容できないことであり、それをぶつける相手さえいれば復讐をしようと考える発想も有していた。

だから実行した。それだけだった。

在り得ぬ事態に陥り、それをミスをしたというものがあり、それが彼にとって許せぬことであり、それに復讐できる力を手に入れたなら。当然の結果だった。

「……俺という魂の牢獄で俺が死ぬまで悔いている」

家族の名を呟いたときとは打って変わり、呪詛を吐くような――実際そうなのだろう。呻く声でそう宣告したかと思えば、突如この白と赤、そして彼だけの空間に黒い穴が開通する。

地面と思われる場所、そして彼の一步手前に出来たその穴は彼が今さっき手に入れた知識で彼が表したものだ。発光体が述べていた異世界への入り口であった。

発光体を血液のようなものを介し取り込んだ彼はその知識を持ち、その力を掌握するに至る。そうしてその知識と力を理解し、彼は確かに元の自分の居場所に戻れないと確信し、納得した。ならば行く所は一つしかない。発光体のもともとの思案の通りになってしまっが、この空間にいつまでもいるという選択肢は彼にはなかった。復讐は済ませ、元へ帰る手段もない。ならば何もしないよりも何かをしていたほうが気が紛れるだろうという諦観を持った結論だった。

「世界を見て回ろう、きつといつか、何かの目標でもなんでも、見つかるはずだ」

諦めを包容した願いを呟きつつ、彼はその穴に自ら落ちていく。

希望も憎悪もなくした彼は、ただ何かを求め筋道どおりに異世界への扉を開いていた。

## 序章（後書き）

副題を【突然拉致られて力を貰ったので拉致った（自称）神の発光体をブチ殺して異世界へ人生の意味を見つけに旅立つてくる】にしようかと思ったが、ネタバレも過ぎると考え自重しますた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0116ba/>

---

HELLSNGのアーカード肉体を授かり異世界へ

2011年12月31日06時48分発行